



岐阜市指定 たんこう あかべよろい かたよろい りゅうもんじ 短甲・頸鎧・肩鎧（龍門寺1号墳出土）

古墳時代中期 岐阜市歴史博物館蔵

龍門寺1号墳は、岐阜市長良地区、長良川右岸の独立丘陵に築かれた龍門寺古墳群に含まれます。4世紀末～5世紀初めの築造とみられ、直径17mの円墳と小規模ですが豊富な副葬品が見つかり、ヤマト政権との関係をうかがうことができます。棺は東を頭にして東西に置かれたとみられ、写真の短甲は東側の棺外に背を上伏せて置かれ、内部には頸鎧・肩鎧も納められた状態で、ほぼ欠損なく出土しました。幅広の長方形の鉄板を革紐で綴じた、かわひも長方板革綴短甲ちようほうばんかわとじたんこうと呼ばれる種類のものです。

企画展

ここまでわかった！ 岐阜の古墳

2024.3.30(土)～5.26(日)

3世紀から7世紀末にかけて、日本各地で多くの古墳が造られました。現在発見されているだけでも、日本全国には約16万基、そのうち岐阜県内には開発などで消滅した古墳を含むと約5,100基の古墳が確認されています。

令和5年には、^{とみおまるやまこふん}富雄丸山古墳（奈良県奈良市）の盾の形をした銅鏡・鉄剣出土情報や、法隆寺（奈良県斑鳩町）の参道脇駐車場植込みが古墳であったことが大きなニュースになりました。岐阜県内でも、令和4年11月に^{ゆうだふんほく}夕田墳墓群（富加町）が国の史跡に指定されました。このような発掘の成果は、調査を行いその成果をまとめ発表されるまでに数年を要することもあります。

本展覧会では、美濃地方を中心に、岐阜の古墳時代について近年の成果もふまえ紹介します。

古墳時代より前、2世紀中頃は、丘陵や台地に首長墓を築く事例がみられます。夕田墳墓群や^{ずいりゅうじやまさんちやういせき}瑞龍寺山山頂遺跡（岐阜市）では、葬送儀礼に使われたとみられる器台・^{たかつき}高坏などの弥生土器や、^{ないこうかもんきやう}破碎された内行花文鏡が出土しています。また、この頃、東海地方では方形墓に台形の造出しが付く前方後方形墳丘墓が築かれます。^{ひがしちやうだ}東町田墳墓群（大垣市）では前方後方形の周溝墓が2基発見され、周溝から東海地方特有の二重口縁壺や、赤く彩られたパレススタイル土器が出土しています。

古墳時代初頭の3世紀中頃、美濃では^{ぞうびざん}象鼻山1号墳（^{にしてらやま}養老町）や西寺山古墳（可児市）等、

弥生時代の前方後方形を継いだ前方後方墳が造られる傾向にありました。ヤマト政権の影響が及び始めると、畿内の古墳と同様の墳形・副葬品を持つ前方後円墳が現れます。4世紀中～後葉の築造と考えられる^{えんまんじやま}円満寺山1号墳（海津市）の出土品には鉄製の剣槍や銅鏡があります。この内、^{やみちながつか}三角縁神獸鏡は、^{ひがしのみや}矢道長塚古墳（大垣市）や^{とうはん}東之宮古墳（愛知県犬山市）など全国8か所10面と同范であり、ヤマト政権から各地域に分配された鏡と推定されます。



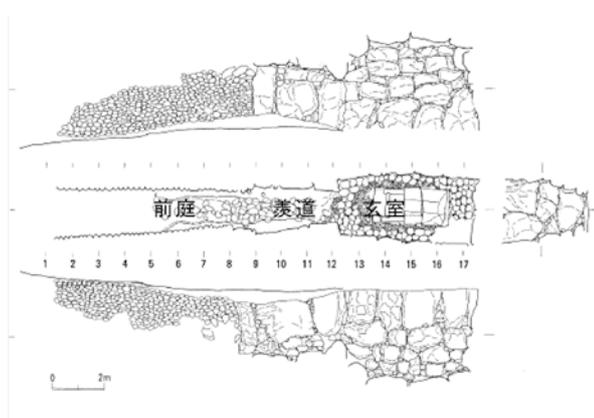
三角縁「天・王・日・月」銘唐草文帯二神二獸鏡
（円満寺山1号墳出土）
古墳時代前期 岐阜県博物館蔵

古墳時代前期の美濃で継続的に首長墓が築かれる大垣・各務原東部・可児地域では、4世紀末頃、県内1・2位の大きさである^{ひるいおおつか}昼飯大塚古墳（大垣市／全長150m）・^{ほうづか}坊の塚古墳（各務原市／全長120m）や、東濃最大の長塚古墳（可児市／全長72m）が築造されました。昼飯大塚古墳と坊の塚古墳は共に墳丘に^{ふきいし}段や葺石、^{はにわ}埴輪を持ち、墳頂から^{ながつか}土師器壺や食物形土製品、玉類などが共通して出土しています。この頃の埋葬施設は墳丘から^{ほこう}縦に墓壙を掘る堅穴式を取りますが、基本的に一つの墓壙に一つの棺が埋葬されるのに対して、^{たてあなしきせきかく}昼飯大塚古墳は同一墓壙に^{ねんどかく}堅穴式石槨・^{もっかんじきそう}粘土槨・木棺直葬と異なる3つの埋葬施設を持つ珍しい古墳です。

5世紀に入ると、新たに岐阜市東部～各務原西部・大野地域に大型の前方後円墳が造られるようになります。^{ことづか}琴塚古墳（岐阜市）は、発掘

調査は行われていないものの、二重の周濠を持つ全長115mの県内3番目の大きさの前方後円墳で、首長墓の系譜であることが推測できます。野古墳群（大野町）は5世紀前半～6世紀初め頃築造の古墳群で、狭い範囲に80mを越える前方後円墳4基など計17基の古墳が密集して造られており、埴輪などが出土しています。この頃の副葬品として、4世紀末から馬具や鎧などの鉄製武具がみられるようになります。龍門寺1号墳（岐阜市）は埋葬施設が盗掘や削平を受けておらず、埋葬時の副葬品の構成や配列状況等が明らかとなりました。三角縁神獣鏡や鎧が副葬されており、被葬者が武人層もしくは階級の高い人物であったことが考えられます。

前方後円墳の規模は5世紀後半頃を境に縮小し、円墳や方墳が首長墓として採用されるようになります。また、この頃、埋葬施設に横穴式石室が採用され、追葬が可能になりました。石室には、直線状の玄室や前壁式の玄室といった畿内の影響のほか、胴張り状の玄室等美濃地方独自の特徴がみられます。両者を折衷する古墳もみられ、大牧1号墳（各務原市）の石室は羨道・前庭が長い畿内式の両袖式横穴式石室で、巨大な石材を天井や壁に使用していますが、礎床や羨道・前庭部には木曾川流域の古墳に特徴的な川原石を採用しています。



大牧1号墳石室実測図

各務原市埋蔵文化財調査センター『大牧1号墳発掘調査報告書一同2号墳・3号墳の発掘調査』2003に加筆

5世紀末頃から、副葬品の構成の主体は鏡や

玉類から須恵器や鉄製武具へ移っていきます。須恵器は蓋坏や高坏の出土例が多く、その形や胎土などから生産地や古墳の築造時期などを推定できます。例を挙げると、南高野古墳（池田町）出土の須恵器は少なくとも3時期に分けられ、6世紀後半の築造後、7世紀前半までに2回以上の追葬があったと考えられます。椿洞2号墳（岐阜市）では、圭頭大刀が須恵器と合わせて出土したため、大刀の副葬時期が特定できる貴重な例となっています。

6世紀後半から7世紀中頃にかけて、これまで古墳を築けなかった身分の人々が、生活域ではない山麓や丘陵を共同墓域として、2～3世代にわたり小規模な古墳（主に円墳）を作り続けます。古墳が首長の墓だけではなく家族・祖先の墓となり、10数基～100基以上の規模からなる群集墳を生み出しました。願成寺西墳之越古墳群（池田町）は、複数の集団が山麓に墓域を分けて1世紀以上造墓を続けました。また、船来山古墳群（本巣市・岐阜市）は、古墳時代を通して400年以上にわたり古墳が作られ続けた全国でも有数の大群集墳です。特に後期古墳の数は200基を越え、石室や須恵器の変遷をよく示しているほか、鉄製武具や農具、玉類など豊富な副葬品が残されており、被葬者の地位を示しています。

仏教が広まった7世紀頃、ヤマト朝廷は仏教のもと古代寺院を建立し始め、それに続いて地方豪族の権力の象徴が古墳から古代寺院へと移り、徐々に古墳が造られなくなります。美濃では、6世紀後半以降に次郎兵衛塚1号墳（可児市）や池尻大塚古墳（関市）など一辺20m以上の大型方墳が出現しますが、7世紀末頃を境に古墳の築造は終わりを迎えます。

展覧会では、発掘調査や研究の成果とともに、これら古墳から出土した遺物を展示しております。ぜひご覧ください。

加藤栄三・東一記念美術館

栄三・東一とゆかりの 作家たち

2024.1.30(火)~4.21(日)

明治22年（1889）、伝統美術の保護と育成を目的に東京美術学校（現 東京藝術大学）が開校しました。それまで次世代の画壇を担う人材の育成方法は、江戸時代の終わりが発祥とされる塾制度が主流でした。

明治31年（1898）岡倉天心は、東京美術学校の校長を辞任し、新時代の日本美術の改革と人材の育成を目的に日本美術院（院展）を設立します。その後、岡倉天心と東京開成所（現 東京大学）の同窓生であった文部大臣：牧野伸顕まきののぶあきの依頼を受け、日本芸術院管轄の文部省美術展覧会（現日展）の立ち上げにも尽力します。これが現在のジャンル分けによる団体公募展の始まりになりました。

後進の育成は、江戸時代より続く塾制度と美術学校教育に託され、研究会と言われる勉強会は、そのころから開催されるようになったのではないかとされています。



加藤栄三「フィレンツェの夜明け」

研究会には、会を主宰する指導者がいて、作家であることはもちろんのこと、団体公募展を運営するための要職も兼ねています。これら研究会は、美術大学・芸術大学で教鞭をとる教授陣が主宰していることが多く、いわば、研究会は、大学院のような役割を果たしており、卒業

生、在校生は、大作を描く前に勉強してきたスケッチや資料などをもとに師範の前で作品についてのプレゼン



高山辰雄「蓬莱」

を行った後、師範より作品の方向性等について指南を受けます。または、本画や小下図を見ながら作品の仕上がりについて相談することもあります。

加藤栄三は、東京美術学校日本画科を卒業後、美術学校の指導教授でもあった結城素明に師事し、作品作りの勉強を続けました。

加藤東一は、同じく東京美術学校卒業後、山口蓬春に師事するとともに、高山辰雄・浦田正夫らを中心とする日本画研究団体「一采社」に参加し、制作活動を続けました。敬愛する指導者のもとで、日展を中心に作品を発表し頭角を現していきます。

栄三・東一の名前が世に知られるようになるとともに、二人を慕い、指導を仰ぎたいという若い日本画家が集まってきました。

門下生を拘束することなく、各作家の個性を尊重する指導で多くの日本画家が育ち、次世代の指導者へと成長していきました。

本展では、栄三・東一の作品とともに、当館で所蔵している門下生の作品と、同時代に日展で活躍した栄三・東一ゆかりの作家の作品を展示します。



加藤東一「伝承」

加藤栄三・東一記念美術館

生誕80周年
洋画家 奥村龍彦 回顧展

2024.1.30(火)~3.3(日)

岐阜県岐阜市に在住し、独立展を中心に活躍した洋画家、奥村龍彦おくむらたつひこが逝去してから6年が経ちました。ひたむきに形態を追求し、自己の表現世界を確立するために突き進んだ画業でした。

奥村龍彦は軍人である父親のもと京城（現韓国ソウル）に生まれました。日本が統治する前の京城（統治前は漢城）は低湿地で、雨が降れば泥濘ぬかるみになり、人があまり住まない地域でした。明治43年（1910）に日本の統治下になってから公共事業が進み、公的機関も建てられ近代的な都市として発展を遂げました。市内の東西を横断するように流れる清溪川（チョンゲチョン）の南側には日本人が住み、北側は朝鮮人が住む地区として分けがされており、日本人が住む南側に日本陸軍の朝鮮司令部が置かれていました。奥村は軍人であった父の関係からこの地で幼少期を過ごしました。



奥村龍彦「野の花（泥の夢より）」

奥村は、終戦後、家族と共に岐阜県岐阜市に移住します。中学生の頃より絵には強い関心を持っており、第78回独立展の図録に掲載された手記の中からそのことがうかがえます。

「私がまだ中学生であった頃、ある知人から一冊の小さな画集をいただいた。常日頃から絵

の好きな私を見てのご厚意であったが、それは初めて見た、ルーブル美術館の素晴らしい作品集であった。胸をときめかせて大切にページをめくっていったが、この底知れない魅惑に、子供心にも圧倒的な感動を受けてしまったのである。」

画集に掲載されていた多くの作品の中から奥村が特に興味を覚えたのが人物画でした。



奥村龍彦「模写の壁（K氏へのレクイエム）」

独立展に発表してきた「泥の夢」作品群は、幼少期を京城で過ごした記憶と敗戦後に苦勞して日本に引き上げてきたときの記憶が錯綜したものから生まれたものです。奥村にとって「泥の夢」作品群は、独立賞をはじめ多くの賞を受賞し、作家としての地位を確固とした代表作になりましたが、奥村の心の中には何枚描いても拭えない京城での安泰から一変した敗戦後の不安や恐怖の記憶がつきまとっていたのではないのでしょうか。

独立協会会員に推挙されてからの奥村は、交流のあった片岡伸介（独立協会会員）氏の影響を受け、これまでの暗い画面の人物画から、俊敏な筆さばきによる明るい画面の人物画へと変貌を遂げていきます。

本展では代表作「泥の夢」シリーズを中心に12点あまりの油彩画を紹介します。

自らの作品を宇宙と考えることで、想像と心象の中から生み出された形態を、創作意欲のまま表現に変えていく制作スタイルで、多くの人物画を描いていきました。奥村龍彦の内なる声をその作品から感じ取ってください。

企画展

ちょっと昔の道具たち

2023.12.8(金)～2024.3.10(日)



今回で28回目の開催となる「ちょっと昔の道具たち」。本展覧会は、小学校3年生が学習する社会科単元「市の様子と人々のくらしのうつりかわり」に対応し、身近な道具のうつりかわりや、暮らしの

変化などを紹介しています。

【各コーナーの構成・主な展示資料】

展示室は、「学校」・「家のなか」・「まちかど」・「あそび広場」の4コーナーに分かれています。毎年恒例の展覧会ではありますが、展示構成や展示資料には少しずつ変化を加えています。

○「学校」コーナー

昭和10年代ごろの尋常じんじょう小学校の教室をイメージしています。昨年度よりも教室の規模が拡大し、黒色の大きな黒板やオルガンなども久しぶりに登場しました。



また、今年度の「学校」コーナーでは、印刷の道具として戦前から使われていた「ガリ版ばん（とうしゃばん）」を新たに展示・紹介しています。

○「家のなか」コーナー

昭和10～20年代ごろの「家のなか」をイメージしています。地下から水をくみ上げる井戸ポンプや五右衛門風呂、夏の夜に欠かせない蚊帳など、当時の暮らしのなかで特徴的な道具を多く紹介しています。



○「まちかど」コーナー

昭和30～40年代ごろの「まちかど」の風景と暮らしの道具を展示しています。今回は、当時岐阜の街を走っていた路面電車を、大型のディスプレイと床面の軌道表示で再現しました。住宅や商店が立ち並ぶ中を路面電車が走り抜けて行く情景をイメージしています。ディスプレイには、実際に岐阜の路面電車で使用されていた前照灯と行き先表示板を取り付けました。



また、「まちかど」コーナー内のケース展示

では、「昭和30～40年代の交通事情」をテーマとして、当時の路面電車や鉄道に関わる資料のほか、モータリゼーションの展開などを取り上げました。昭和30年代後半になると、日本でも自動車の保有台数が大きく増加し、車社会化が進みます。一方で、このモータリゼーションの波は、交通事故の急増を招き、当時「交通戦争」と呼ばれるまでに社会問題化しました。岐阜市では、昭和30年代半ばに初めて「交通安全対策費」という項目が予算書に盛り込まれ、歩道橋やカーブミラー、道路照明などが整備されていきます。ケース内展示では、そうした資料のほか、「防塵」を主目的として岐阜市が特に力を入れていた道路の舗装^{ほそう}についても紹介しています。



そのほか、「まちかど」コーナーでは、今回も駄菓子屋・喫茶店・電気屋などの各商店を再現展示しました。駄菓子屋には、昔懐かしいお菓子や駄玩具に加え、店頭のパチンコ台を設置しています。



○「あそび広場」コーナー

ベーゴマやお手玉、だるま落としやけん玉など、昔ながらの遊びが体験できるコーナーです。

今年度の「ちょっと昔の道具たち」では、新たに貝合わせやゴム跳びを追加しました。

また、上記の4コーナーのほか、会期中の土日祝日には、昔懐かしいおもちゃを販売する「なんでもや商店」がオープンしています。



【ボランティア活動の推進について】

当展覧会では、歴博ボランティア「ものしり博士」が展示室内で活動し、学校団体や一般の観覧者に対し体験補助や展示資料の解説などを行っています。「ものしり博士」は、約50名の方が登録しており、それぞれ自身の体験談なども交えながら、子どもたちへ熱心に解説をする様子が多く見られました。

上記に加え、週末には中高生ボランティア「SMC (Student Museum Curator)」が、イベントの体験補助や展示解説などを行っています。こちらは約25名が登録し、担当学芸員からの事前研修を受けたのち、活動に臨んでいます。

【関連イベントについて】

今年度の「ちょっと昔の道具たち」では、会期中の土曜日や日曜日に、「お手玉づくりと遊び」・「糸紡ぎ体験」・「綿くり体験」・「昔のおもちゃ作り教室」といった各種関連イベントを開催しています。展覧会最終日の3月10日まで、イベント目白押しですので、ぜひご来館ください。

(詳しいイベントスケジュールについては、当館HPよりご確認ください。)

館蔵資料紹介

目貫 這龍図 江戸時代 18世紀 長さ4.8cm 幅1.3cm



室町時代から多くの刀剣を生産していた美濃では、江戸時代中期ごろ、「美濃彫」と呼ばれた刀装具が作られました。黒色の赤銅を素材に秋草をモチーフにした作品が多く、表面から深く垂直に彫り下げて絵柄を浮き立たせ、金の色絵を効果的に用いた華やかなデザインが特徴的です。目貫は、本来、刀身が抜けないように茎を柄に固定する目釘を覆う金具でしたが、やがて装飾品として目釘とは独立して柄の表裏に装着されるようになりました。

体をくねらせた龍を、金の薄い板を打ち出して形作っています。右の作品では2体の龍が向かい合い、左では上に向かう龍とそれを下から見上げるような龍の姿が描かれています。大きな目の頭部に細い体がうねり、手足の爪は力強く表現される一方、抜孔（透かし彫りの部分）が多く繊細な印象を受けます。角や細く伸びたひげ、深くくぼんだ目やうろこの一枚一枚まで細かく造形され、職人の技術の高さが見てとれます。

利用の御案内

■ 開館時間 午前9時～午後5時
(歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館の入館は午後4時30分まで)

※特別展開催中は変更することがありますのでご注意ください。

■ 休館日 毎週月曜日と祝日の翌日、年末年始(12月28日～1月3日)
(月曜日が祝日の場合はその翌日)

※特別展・企画展開催中は変更することがありますので、ご注意ください。

■ 観覧料 ◎歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
(団体は20人以上)

高校生以上…310円(団体250円)

小中学生…150円(団体90円)

両館共通で観覧される場合

高校生以上…520円(団体410円)

小中学生…260円(団体150円)

※特別展は、その都度料金を定めます。

◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。(ミライコID可)

①岐阜市在住の70歳以上の方(特別展を除く)

②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳、難病に関する医療受給者証の交付を受けて

いる方、及びその介護者1人

③家庭の日(毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の方

④③に同伴する家族(高校生以上)の方(特別展を除く)

⑤岐阜市内の小中学生

◎原三溪記念室は、無料でご観覧いただけます。

交通案内

◀歴史博物館、加藤栄三・東一記念美術館▶

JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、徒歩約5分。岐阜公園内ロープウェイ乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。

お車でおこしの際は、岐阜公園駐車場をご利用ください。

詳しくは岐阜市歴史博物館ホームページをご覧ください。

<https://www.rekihaku.gifu.gifu.jp/>



◀原三溪記念室▶

岐阜バス茜部三田洞線 下佐波及びカラフルタウン行きに乗り、「下佐波」で下車、徒歩2分。

岐阜バス茜部三田洞線 もえぎの里及び高桑行きに乗り、「もえぎの里」で下車、徒歩すぐ。

博物館だより No.116 2024.2

編集・発行 岐阜市歴史博物館

(分館) 加藤栄三・東一記念美術館

(分室) 原三溪記念室

〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1

〒500-8003 岐阜市大宮町1-46

〒501-6121 岐阜市柳津町下佐波西1-15 もえぎの里2階

☎058(265)0010

☎058(264)6410

☎058(270)1080